

After Fukushima: Addressing anxiety (letter)

## 放射線災害後の福島で：不安に向き合う(letter)

緑川早苗

福島県立医科大学医学部放射線健康管理学講座

### 著者

福島県立医科大学医学部放射線健康管理学講座：緑川早苗

福島県立医科大学医学部甲状腺内分泌学講座：鈴木悟

福島県立医科大学医学部放射線健康管理学講座：大津留晶

### 要約

2016年3月4日号のサイエンス誌に「Epidemic of fear (不安の流行)」という記事が掲載された。福島第一原発事故後の甲状腺超音波検査について D. Normile 氏が、小児の甲状腺癌の自然史が不明のままに、甲状腺癌が多数発見され過剰診療になっている可能性について述べている。

まだ明らかでないことが多い中で、福島の住民は甲状腺検査の結果と放射線被ばくを直接的に関連づけて考える傾向がある。多くの住民は事故直後自分がとった行動（例えば避難したのかしなかったのか、子供をどこで遊ばせたか、子供にどんなものを食べさせたかなど）と、超音波検査で発見される結節性病変が関係していると考えがちである。特に母親は検査の結果に新たな不安を持ち、それが自責感へとつながっている。このような状況に対応するために私たちが取り組んでいることを二つ紹介する。

一つ目は、通常健診での結果は文書で通知されるが、検査直後に一人一人に結果を直接説明する取り組みである。その目的は検査の結果に関する不安を取り除き、放射線と健康リスクに関する漠然とした懸念に対応し、甲状腺スクリーニングの意味を説明することにある。

二つ目は検査の対象者である子供達に対しての甲状腺検査についての出前授業の取り組みである。放射線と甲状腺検査の関係や検査結果の解釈について説明している。検査を受けるかどうかの意思決定はしばしば子供たち自身よりも、保護者の不安を反映している。出前授業を通して、私たちはスクリーニングのメリットデメリットについて考えたり、放射線の健康リスクに関して両親と話をする機会を、子供たちに提供しようと考えている。

### 掲載情報

「Science」 (2016)

---

Midorikawa S, Suzuki S, Ohtsuru A.

Science. 2016 May 6; 352(6286):666-7.